

ら は た 探訪 歴史 40 クラブ 其の

ちよっぴり昔の建物「続編」

TAHARA
History Inquiry
Club

建物ではありませんが、加治町の火の見櫓は市内に残る数少ないものとして貴重です。

この火の見櫓は、残っているプレートから昭和30年3月に豊橋の鉄工所により建てられたことがわかります。鉄骨で組まれた櫓の頂部には、屋根と見晴し台があります。屋根からはもちろん半鐘が釣り下がっています。

火災の連絡では、この半鐘を叩くリズムによって火事の種類などを知らせていました。今よりずっと静か

であった時代では良く鳴り響き、住民は半鐘の音に、火災が発生した事実を知るとともに、消防団の活躍を期待したものです。

火の見櫓を見ると、地域の安全に努力している消防団の皆さんの勇ましい姿を思い浮かべます。子供たちは半鐘を叩くその姿にあこがれたり、また、度胸試しで櫓に登って大人に怒られたりしました。何より、火の見櫓は地域の要所であり、日々の生活の風景の中に溶け込んだ造形であったことから、その思い出はつきないでしょう。

加治町の火の見櫓にはこんな工



今も加治町に残る火の見櫓

ピソードもあります。昭和37年7月2日の集中豪雨で、宮川の増水の危険を察した森下洋子さんは、火の見櫓に初めて登る恐怖と豪雨にも負けず、半鐘を打ち鳴らし、住民に知らせ、被害を最小限に食い止めました。町はその勇気を称え、感謝状を贈っています。(田原広報第86号掲載)

各地区には必ずあった火の見櫓でしたが、同報無線の設置によってその役割を終え、現在ではほとんど撤去されてしまいました。地域の防災のシンボル、そして地域の生活風景として溶け込んだ火の見櫓。そういった点で、この火の見櫓は数少なく

貴重なものですね。

最近、このような人々の思いがまつまっているちよっつと前の建物、構築物が気になります。みなさんも身近で探してみませんか。(増山)

生涯学習課 ☎ 23局3531



火の見櫓には半鐘の姿が



誇らしげな消防団のプレート(現在は南部分団)